

シラウオの資源生態調査

シラウオは河口域に生息し、全長 10cm 程度に成長する年魚で、春先に吉井川や高梁川河口の四ッ手網や刺網により漁獲される。その淡泊で上品な味は、卵とじや天ぷらの素材として絶品である。今から 40 年ほど前には県内で年間 5～10 トンの漁獲があったが、河川環境の悪化等の影響か、近年は漁業が存続できないレベルにまで激減している。



写真1 シラウオ親魚
(上は雄, 下は雌)

そこで水産研究所では、資源回復措置の検討を目的として、平成 25 年度から児島湾においてシラウオの生活史や生息環境を調査している。10～3月にアキアミを漁獲するすくい網を用いた試験操業では、成魚が吉井川河口の水門湾に分布し、雌は2月以降に完熟卵を持つことが分かってきた。

また、2～6月にシラウオの産卵場と思われる海

底から砂泥を採取したところ、砂に付着する産着卵を得た。卵は2～5月の長期間、吉井川下流から河口域の水深 1～2mの中粒砂(約 0.4mm)で局所的に確認された。

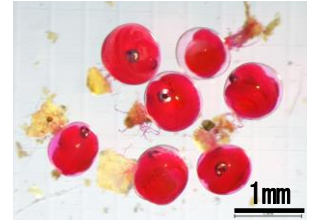


写真3 染色された産着卵
(付着糸で砂にまとわる)

仔稚魚は、5～11月に水深約 0.5mの泥干潟にイサザアミやアキアミ等の小型甲殻類とともに出現し、夏場の高水温期には成長が停滞するなどの生態も明らかになってきた。

ただし、こうして周年行っている各種調査での採集尾数は、宍道湖や千種川河口など他の産地と比較するとごく僅かであり、資源は危機的な状況にあると考えられる。今後計画している産卵場の詳細調査や人工的な仔魚育成の試みも踏まえながら、具体的な資源回復策を提案したいと考えている。(資源増殖室：草加)



写真2 採捕漁具
(上：仔稚魚用サーフネット,
下：成魚・親魚用アミすくい網)

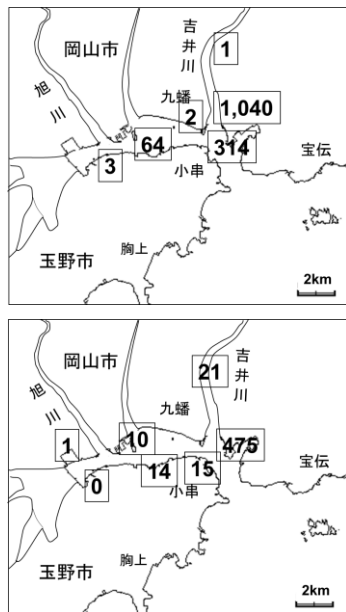


図1 児島湾における定点別採捕尾数
(上図：5～11月の仔稚魚の合計,
下図：12～3月の成魚の合計)

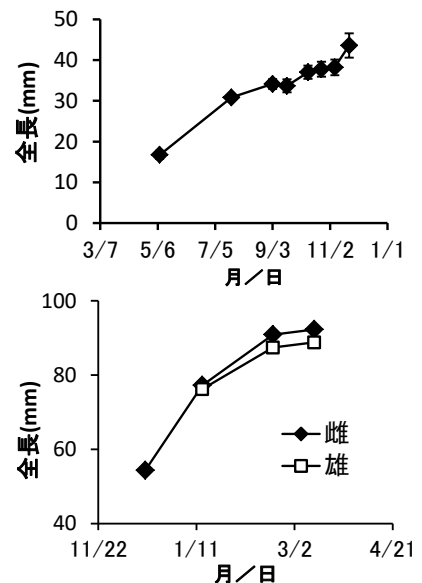


図2 シラウオの成長
(上図：仔稚魚の平均全長,
下図：成魚の平均全長)